

# コミュニティケア を担う協同労働

小菅 恵子（ワーカーズコープけやき）



5年前に縁あって労働者協同組合に参加しまして協同労働を学ぶことができました。労働者協同組合でヘルパー事業を始める前は、10年間特別養護老人ホームで働いてきました。その後、夫の両親が介護状態になりそこをやめて、また重なるように私の母が介護状態になり3人面倒を見る経験をしました。施設の中で考えてきたこと、もっとこうしたほうが良いということを協同労働の中で実践したかった。その実践が労働者協同組合での5年間だったかと思っています。

いろいろなところで評価をいただけるような事業になったのですが、大きく二つのことを学んだと思います。一つは労働者協同組合では良い仕事をして地域に貢献できるという理想が持てたことです。良い仕事をしようというコンセプトがあったからこそ続けてこられたかと思っています。また同じ理想を持っている仲間と仕事ができただけで、仲間作りができたことが一番大きな収穫だったと思っています。「良い仕事をし地域に貢献できる」という誰にも恥じない目標が持てるということは、どんなところへ行ってもどんな人にも自分の

仕事を語れるということでは、利用者の方も私たちの事業に共感してくださるということ、辛いこと、怒られること、拒否されることもあります。応援してくださる方がいるということによってやってくられました。

協同労働ということ私はまだ分かっていないかもしれませんが、共感・配慮・責任感をもってやれることと理解するならば私はホームヘルパーの仕事はあっているなと思っています。ヘルパー講座の時もそこを強調して話します。ヘルパーの仕事は1時間という単位でいくらもうという簡単な中身ではないんですね。非常に難しいのですが、こういう仕事はヘルパー自身が、パート労働として理解するのではなく地域の中でいい仕事をし、地域をよくしていこうという理想が必要で、そうすると1時間の中の働き方も変わってくるし、利用者に対する人間としての対応も大きく変わってくると思います。そういうホームヘルパーの理想的な働き方が協同労働の中にあると思います。それを協同労働と理解してきました。ヘルパーは、相手を受容する。相手に共感することも学びます。相手の納得

を得る、説得ではなくて納得を得るといふことは信頼関係が出来ないとできません。そういう実践を毎日していきます。

それはどんな仕事にも生かせると思います。いま地域で新しく始めた「ホッとステーションさくらはうす」というのは、ほっとするホッとと温かいというホットをかけています。そこでは月曜から金曜まで、パソコン講座、書道講座、篆刻講座、絵手紙講座、男性料理講座、手づくり講座など広報で募集しますが、今まで70人くらいから電話をいただきまして、常時30人くらいが講座に出ています。

まず、電話をかけてくださる方が非常に躊躇して不安な感じでかけて下さるのが伝わってきてそれに答える私は、ヘルパーとして学んできたことを生かして、相手に安心感を与えて納得していただくのです。最初男性の料理講座は1人でした。1人でもよいということでしたので、私が講師をして2人で料理を作って食べました。その方が魚のおろし方を教えて欲しいといわれ、私は魚がおろせなくて魚のおろし方を教えられるヘルパーさんを講師にしました。今6人いますが、その中には糖尿病の方、ガンで胃を摘出された方など皆さん和気藹々とやってらっしゃいます。最近はみなさん自分の役割を心得ていて教えなくてもできてしまうんです。これって協同労働！なんて思っていますが、その中からけやきのヘルパー講座に1名参加されることになっています。この先6人を将来食の事業に生かせないかと思っているものですから、その話をいつもすると目が輝いてきます。カレーならいいとか、肉じゃがならいいとか。

もう一つよかったのは講師です。一回500円ですから講師には一人につき250円しかあげられません。10人くれば2500円ですが、3人であれば750円です。最初はボランティアをやって少々お金が欲しいと思っていらっしゃっている方が、だんだん変わってきます。書道の先生も公民館などでちゃんとお金を取って教えていらっしゃるのですが、ここへ来るのがうれしいと言って下さる。いろいろな人間の内包されて持っているもの、地域のお役に立てるとか、人に関わって人が変化していくのがおもしろいとかそういうことではないでしょうか。今まで人に使われて働いてきたときには得られなかった、生きている実感を欲しがっていらっしゃるのではないのでしょうか。

生徒は生徒でみんな入口はパソコン講座であったり、書道講座であったりしますが、つきあってみるとみんな多芸多才の方たちです。そういう方たちに私はこういう考えでここを開いたんですよという共感していただけるのです。今は仕事を持っているけれど、「やめたらあなたのように自宅を利用してやってみよう」というように共感者をつくっていくこともできます。

これはボランティア活動ですが、これでは終わらない。この次は何をするか。わくわくするような事業であるかもしれないと思っています。いろいろな人のつながりを生かして事業がしたい。配食事業があってもいいし、レストランの事業があってもいいし、今小物作りをしていますから工房、地域のニーズと私たちの事業化がうまくマッチすれば事業にしていきたいと思ってやっております。